

5 年学年集会

校長 梅田 貴昭

- 1 1年間、6年生を支える地道な活動、ありがとう。4月は、学校を支える大黒柱です。
- 2 心があたたかくなる「6年生を送る会」の計画・運営、ありがとう。
ある子の「校長先生、今日は楽しかった」の言葉は、全校がつながった証拠
- 3 私は広がる 学校はどんなところ？
自分と違う考え方、感じ方をする人がいることを知り、その人とよく生き合う力を身に付ける
外国人を多く雇う会社経営者の話から 違いは自分を豊かに成長させる
- 4 郷土の偉人 杉原千畝さんに学ぶ

すぎはらちうね

杉原千畝さんについて知ろう

6年生の道徳の教科書に、「六千人の命を救った決断—杉原千畝—」という題で掲載されている杉原千畝さんは、岐阜県八百津町の出身だと言われます。彼の生き方について知り、感じ考えてほしいと思います。

岐阜市PTA連合会（お父さんやお母さんたちの子どもたちを支える組織）も、子どもたちに杉原千畝さんの生き方に触れてほしい、「命の教育」の大切さを伝えたいと、杉原千畝のパネルをつくりました。そして、そのダイジェスト版を岐阜市内のすべての小中学校等に配りました。明郷小学校では、図書室に掲示してあります。

杉原千畝さんは、第二次世界大戦中、リトアニアのカウナス日本国総領事館に勤めていたとき、日本の同盟国ドイツの迫害によりポーランドなどのヨーロッパ各国から逃れてきた難民に対して、外務省からの命令に反して独断で大量のビザを発給し、亡命を手助けし、約6,000人の避難民（大多数がユダヤ人）を救出しました。

彼は「東洋（日本）のシンドラ—」、彼の発給したビザは「命のビザ」と呼ばれ、日本の外交官では世界で一番知られていると言われます。そして、イスラエル政府から「諸国民の中の正義の人」として表彰されたり、リトアニアには「スギハラ通り」と名付けられた通りがあったりもします。しかし、日本においては、政府の指示に従わなかったため、戦争後、外務省を退職させられ、存在さえないものとされていました。そのため、彼の人生は、職を転々とするなど恵まれたものではありませんでした。

杉原千畝さんに命を救われたユダヤ人が彼を探し出したことで、日本でも少しずつ彼の功績が分かるようになりました。名誉が回復されたのは、戦争後46年たった2,000年のことでした。

彼の残した「大したことをしたわけではない。当然のことをしただけです」という言葉は、人として当たり前のことをした、人道に生きた彼の生き方を表していると思います。

みなさんには、杉原さんがビザを書くまで悩みや迷い、ビザを書き続けた思いなどをぜひ想像してほしいものです。





岐阜県八百津町の人道の丘公園「杉原千畝記念館」



福井県敦賀市の「人道の港敦賀ムゼウム」

※杉原千畝さんのゆかりの地を訪れ、杉原さんや難民を救った人たちの思いに触れるといいと思います。

ユダヤ人の命のバトンは受け継がれ、日本を経由して亡命国へ

杉原千畝さんが救おうとした命には、もう一つの物語があるように思います。

杉原さんはユダヤ難民の命を救いたいとビザを書き続けました。しかし、助かればと願うことはできるけれど、ここから下の地図のように長い難民の旅が始まるのです。

疑問に思うのは、どのように、命を守ってくれるところまでたどり着けたのかです。シベリア鉄道に乗り、ウラジオストックに着いても、どんどんやってくる難民に日本の役人や船員は疑問をもち、日本へ渡らすことを戸惑ったのではないのでしょうか。福井県敦賀にたどり着いても、知り合いもない異国の日本、敦賀や神戸の人たちはどんな対応をとったのでしょうか。敦賀では、難民にリンゴをあげて命をつないだ、神戸では施設で難民を一時的に預かり、



外国へ送り出したという記録もあります。日本人のやさしさを感じます。杉原千畝さんの思いが知らない人から人へと伝わり、難民の命がつながっていきました。どんな動きがあったのか知りたくなります。

戦後、亡命先の国で生き延びている人、イスラエルなどユダヤ人の多い国や地域に戻った人など、その人生は様々ですが、助けられた人の命は子や孫へとつながれ、現在は、20万人の命と広がっていると言われます。

この話は、自分づくり、学級づくりにもつながると思います。

○学級、全校のために動くことは、自分の成長につながる。勇気をもって正しいと考えることを行う。

続いてくれる人がいるといいな、うれしいなと願うこと、信じることができると勇気がでる。

○勇気を出した思いや行動をまわりの人が知り、続く人、つながる人が出て波紋のように広がっていく。

「自分は自分が正しいと思ったことをやっただけです」と言えたら、杉原千畝さんのようですね。